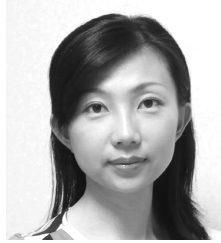




## 子育てライフ・病児保育編



愛知淑徳大学心理学部心理学科専任講師

### 久保 (川合) 南海子

(くぼ (かわい) なみこ)

2002年、博士号取得(日本女子大学)後、京都大学霊長類研究所にて研究機関研究員、日本学術振興会特別研究員(PD)。2007年、京都大学こころの未来研究センター助教を経て、2009年より現職。

いま、結局5回目となった子どもの手術の付き添いで入院している病室で、これを書いています。子どもが入院すると、その世話のため親も一緒に入院し、同じベッドで寝起きします。4組8人の親子がカーテン1枚で仕切られただけの一部屋で暮らします。そんなことは、病気の子どもを持つまでまったく知りませんでした。心臓の大手術、ドクターヘリ、救急医療などドラマの世界かと思うような現実が目の前にありました。

#### NICCUを知っていますか？

新生児と乳児の心疾患集中治療室(Cardiac Care Unit)のことです。産まれてわずか半日後、わが子は二つの病院を経て、そこにいました。先天性の疾患で、すぐに、そして少なくとも合計3回の心臓の手術が必要と告げられ、子どもを産んだ喜びもつかの間、ただ呆然とするばかりでした。

4ヶ月の入院後、子どもが初めて家にやって来ました。でも、すぐ再入院と追加手術。仕事への復帰を考えはじめたのはその後でした。自宅は名古屋、職場は京都、実家は東京。慢性疾患の子どもを毎日どこに預けるか？ 復職には大きな問題が待っていたのです。

#### 「例外」への脆さ

まだ大きな手術が2回も待っていましたが、日常生活に問題はありませぬ。主治医からも集団保育は可能と言われていたので、まず夫の勤務先である名古屋大学内の保育園に話をしに行きました。すでに入園の審査を経て内諾を得ていました

し、内閣府の推進する男女共同参画事業の一環で設立された保育園ですから、このようなケースにこそ対応してくれると期待していました。

ところが現場では、疾患のある赤ちゃんを預かることに対してかなりの抵抗がありました。どうして民間に預けないのかとの電話も、事務職員から夫にかかってきました。何かあると困るそうです。だから、夫のいる保育園に預けたいのに。話し合いを重ねましたが、受け入れられませんでした。現代の社会モデルとしての保育園を標榜しているのに、心底がっかりしました。

その時期から入園できる保育園はないので、次はシッターさんです。まず、厚生労働省のファミリーサポートセンター事業に問い合わせました。すると、慢性疾患のお子さんは病児だから対応できないとの返答。そこで、病児・緊急預かり対応基盤整備事業の某施設を訪ねました。しかし、そこでは緊急性がない慢性疾患は健康児の扱いです、というのです！

保育園では病児にされ、病児保育のシステムでは健康とされる。子育て支援システムは格段に整備されつつありますが、そこで生じる「例外」にはまだ対応できないのだと痛感しました。

#### 「事情」に例外なんてない

子どもを預けられなければ復職することはできません。途方に暮れながら、厚生省関連の21世紀職業財団が提供する保育サポーター事業に電話しました。すると、

即座に数人の登録サポーターさんを紹介してくれました。慢性疾患があり手術待機中でも可能なか聞いてみると、まずは実際の様子を見させてほしい、とのこと。そこには、さまざまな事情に対応してくれる力強さがありました。

「お困りでしたね、一緒にがんばりましょう」との言葉を聞いたときには、本当にホッとして涙が出ました。子育て初心者私と闘病する子どもを親身になって支えてくれた立川伸子さんと塩谷敦子さんに心から感謝しています。

異動先の愛知淑徳大学にも、昨年から学内に保育室ができました。病気のことも「できることは何でもしたい」といって、本当にきめ細かい対応をしてくれます。授業中に、学内を元気に散歩するわが子を見かけると、楽しいやら講義の調子が狂うやら。多くの人に支えられて仕事を続けられる喜びと感謝の気持ちがわいてきます。

子育てや介護など支援が必要なケースには、それぞれの事情があり、すべてが例外です。だから困っていて、個々のケースに対応できる制度こそ、本当の助けになるのです。そんな制度が増えることを、切に願ってやみませぬ。



小児病棟のプレイルームにて。入院中でもみんな遊びたくてたまらない。ここにはいつも子どもたちの声があふれています。